

# みずのわ

学校だより  
【第13号】  
令和5年2月28日(火)  
石巻市立石巻小学校

## 【出発の時】

3月を“別れの季節”と呼ぶ人がいますが、6年生にとっては、まさにその時が訪れようとしています。思い起こせば、小学校生活の半分にも及ぶ3年という長きに渡って6年生はコロナ禍での学校生活を余儀なくされました。これまで当たり前に行っていたことができなくなり、何をすることもマスク越しの生活となってしまいました。下級生のお世話など学校のリーダーとしてもっともっと活躍の場があったであろうことを考えると、申し訳ない気持ちでいっぱいです。せめて、最後の卒業式くらいは(文科省の指針に大きく異ならないよう、また個人の考えを尊重するようにしつつも)一人一人の顔を保護者の皆様にしっかり見ていただくことができるような式を挙行したいと考えております。

卒業式まであと13日。いよいよ、別れのとき、いや、再び始まるドラマのための出発のとき、来たれり。



菊地優良 作

## 【教員という仕事】

私的な話になりますが・・・私には、30歳を超えた娘と息子がおり、それぞれ独立して生活していますが、彼らが学生だった頃、私とこんなやり取りをしたことがありました。

娘 「教職(教員免許を取得するための授業)取った方がいいかなあ。」

私 「親というひいき目なしに正直に言うね。教員としての資質は十分あると思うよ。でも、親の立場から言わせてもらおうと、自分の子供が休日も教材研究したり、生徒指導で遅くまで残ったり、保護者とのトラブルがあったり・・・娘が泣く姿を見たくないなあ。」

娘 「あっ、そうなの。じゃあ止める。」

私としては、「そんなしんどい仕事であっても頑張る」という返しを少し期待していただけたのに、あまりにも速い決断にかなり拍子抜けをしてしまいました。

でも、少したってから妻を通じて真の理由を聞かされました。それは「アルバイト先の塾で子供一人を教えるのでさえ大変なのに、受験の合否などその子の一生を左右するという重要な仕事の責任を担う自信がない」というものでした。

私からすると、だからこそ、教師という仕事の重さを理解できる者にこそ、教員になってほしかったのに・・・と思いましたが、私の正直な助言は後の祭りでした。

息子とはこんなやり取りでした。

息子 「教員ってブラックなんですよ。友達みんな言ってる。教員はやばいって。」

私 「そのやばい仕事してる人に育てられたんでしょう。」

息子 「残業しても手当ないんですよ。それやばいって。俺なら定時で速攻帰る。」

私 「そんなに簡単に帰れないんだって。それに残業手当は確かにつかないけど、正しくは最初からもらってるんだ。調整額として基本給の4%ついてる。すずめの涙だけどね。」

息子 「やっぱ、俺、無理なあ。」

(それはこっちのセリフですよ。教員の仕事の尊さを分からんお前が教員になるのは無理なあ。)と言いたかったけれど、飲み込みました。直情的な私がなぜ言葉を飲み込んだのか、その時は分かりませんでした。よくよく考えて理由が分かりました。息子の言うことに一理あったからです。

全国で教員不足が叫ばれています。宮城県も例外ではなく、病気休暇等の教員が出てもすぐに補充されるのが難しい状況が続いています。なので、担任が休んでしまった場合は教務主任など担任以外が担任代理を行うことになり、その人のもともとの仕事内容を複数の職員で分担するなどするから一人当たりの仕事量が当然増え、過重労働、残業は必須という構図になります。そうでなくても、教員の仕事に区切りはなく、子供たちによりよい授業を提供しようとするならば時間はいくらあっても足りません。

どんな仕事でもそれぞれに大変であることは重々承知の上ではありますが、やはり、キリの見えない仕事、金銭的な遣り甲斐を感じることができない仕事はモチベーションを上げるのが難しいものです。でも、だからこそ、このような状況を了知した上で、教員になった人、教員を目指す人は真に志のある人ではないかと思いたいのです。

娘の選択肢も、息子の思いも、それぞれ間違いではありません。ある意味今の世相を反映していると言っても過言ではありません。

そうであったとしても、私は、この仕事を選んで悔いはないし、純粹でひたむきな子供たちから日々感動をもらい子供の師でありながら人として子供からたくさん教えてもらえる最高の仕事だと自負しています。



本屋で働く私(粘土) 鈴木梨央 作

後進を信じつつ、教員という重責のある尊い仕事に、あと1か月、全力で取り組もうと思えます。

(校長／川田知宏)